

東西文明の比較 (25)

▼海を渡った人々▲

陽光新聞社・顧問 塩澤宏宣

🏛️ 選び抜かれた人物

遣唐使のメンバーは、大別して「使節」「船員」「随員」「留学者」になります。

「使節」は、大使以下、録事(書記官)に至る四等官、従者などの、いわゆる外交使節の本体です。日本を代表する立場ですから、それにふさわしい人物が選ばれました。家柄、学識教養、風采など、総合的な選考がなされました。

第1期の大使では、犬上・吉士・高向などといった渡来系氏族の出身者が多かったようです。この時期の遣唐使は、外交・留学などで知識が豊富な実務優先者が選ばれていました。それが、2期以降になると、粟田・多治比・大友・中臣・藤原・石

上・石川・平群・佐伯などのヤマト朝廷以来の名族から選ばれました。

この違いは、日本の文明化の進展に関係しています。遣隋使時代を含め、早い時期には外交に長けた「専門氏族」に頼っていましたが、次第に中央の大氏族にも中国的な教養が行きわたり、遣唐使節にふさわしい人物が出てきたのでしょう。

🏛️ 公・私の通訳

使節の中でも重要な人たちがいました。通訳(通事・訳語)です。これらには、中国語をはじめ、新羅語、奄美語の使い手がいました。新羅や奄美(南西諸島から沖縄を含む)は、それらに漂着した時を想定していたのです。彼らの手当は、先に述べた録事などの四等官に匹敵していました。それだけ通訳が重視されていたのです。彼らは、公人として使節の正式な通訳ですから私的な通訳ではありません。

留学僧の最澄は、「自分は中国語に習熟していない。訳語(通訳)は使節用だから使えないので弟子の義真を帯同したい」と申し出ています。有力者は私的な通訳を同行させることも出来たのです。

🏛️ 遣唐使船を操る船員たち

次に重要なのが船員です。知乗船事は、各船の船内を統括する「船長」です。承和の遣唐使(836年:第19

次)では、4名の知乗船事がいました。手当は、やはり四等官に匹敵していましたから、重要な位置づけだったのでしょう。次に船師、操舵の責任者。現代では「機関長」です。舵取り、操舵手を通じて水手を指揮しました。彼らは皆、公民から採用されましたが、なかにはその活躍ぶりから、正史に名を残す人物がいました。第12次遣唐使船の舵取り、川部酒麻呂です。彼は第4船の舵取りでしたが、船尾から起きた火災の時、火傷を負っても舵を離さなかったということで、帰国後、その手柄によって従七位下に任じられ、肥前国松浦郡の役人に取り立てられました。

遣唐使として出かけた者は、帰還すると、全ての税負担を3年間免除するという決まりでした。時によっては、10年間の免除とか、同居する家族にまで免除の範囲が拡大された例もありました。危険を冒しても船員になりたいという若者が多かったようです。

🏛️ 技術研修生が広い分野へ

一種の留学生です。学ぶべき分野を決め、それを習得すれば帰国するという「短期留学」です。ガラスや釉薬を学ぶ「玉生」、鍛金技術を学ぶ「鍛生」、鑄金技術を学ぶ「鑄生」、木竹工を学ぶ「細工生」、薬や香料を学ぶ「薬生」などなど。一風変わったところでは、舞いを学んだ「舞生」などもあったようです。「生」は、技術などを学ぶ生徒の意味です。

🏛️ 最澄と空海

「我が日本国の延暦年中、叡山本師(最澄)入唐の時、空海阿闍梨、元薬生為り。同じく共に入唐し、慧果阿闍梨に遇いて灌頂¹⁾を蒙る。則ち本師は先に還り、平城の北野に始めて灌頂を行えり」

この一文は、9世紀後半に活躍した天台宗の僧、安然が記した「真言宗教時義」の一節です。この文によると最澄と空海が同じ遣唐使で渡海²⁾し、同時に密教を学んだことにふれています。注目されるのは、空海が「元め薬生為り」とあることです。

太政官符によれば、空海は延暦二十二年四月七日に出家したとあります。これは1回目の遣唐使船が出発する直前のことになります。この時、空海は31才でした。つまり空海は、最初の任命時点では、まだ正式な僧ではなかったのです。おそらく空海は、それでも入唐したい一心で、薬生になる道を選んだのではないのでしょうか。

もともと大学寮出身の空海は、20代から仏教以外

の学問に造詣が深く、道教にも通じていました。道教は医術や博物学とも関係があり、薬の知識は必須です。そうした知識は、青年期の著作「聾瞽指帰^{ろうこしいき}」や晩年の作「秘密曼荼羅十住心論」にも見事に生かされています。空海は、持ち前の語学力を生かして、密教の完全な伝授を受けると、帰国する遣唐使船で早々に帰国してしまいます。日本で布教する機会を一刻も早く確保したかったのでしょう。横道にそれますが…唐の高僧、慧果(恵果)は、仏教(密教)は唐では育たないとみて、異国から来た空海に、その全てを伝授したそうです。その心は鑑真と同じかもしれません。

安倍仲麻呂と吉備真備

遣唐使の使命は、日中の外交にあったことは事実ですが、真の使命は長期・短期の留学であったことは間違いありません。日本の場合、国内統治のために中国王朝の権威を借りる必要がなく、外国勢力に脅かされる事がなく、外交努力はそれほど重視されませんでした。

留学者とえば、まず安倍仲麻呂と吉備真備を挙げるべきです。この二人は、同じ第7次・養老元年(717)の遣唐使で入唐しましたが、出自は全く異なりました。仲麻呂は当時16才、正五位下の舟守を父に持つ中央の名族の出身ですが、真備は23才、祖父・父共に五位にも達していない岡山豪族の出身でした。

仲麻呂は入唐後、唐の大学に入学、しかも科挙に合格して左春坊司経局の校書(皇太子付きの書物校正係)に任じられました。この職は、貴族の子弟が任官を希望する清官(格式は高いが実務の少ない官職)です。仲麻呂は、玄宗皇帝の愛顧を受けて順調に昇進を重ね、皇帝に近侍する左補闕(ほけつ)にまで昇進しました。しかし天平勝宝の遣唐使が帰国する時、願い出て帰国を許されましたが、船が遭難してベトナムに漂着して帰国は実現しませんでした。唐に戻り、やがて昇進して安南節度使となり、770年在唐のまま亡くなりました。日本人には珍しい「唐の官人」となった人です。

一方、真備は入唐後、鴻廬寺^{こうろじ}で四門学の助教、趙玄黙から出張講義を受け、在唐は16年に及びました。唐朝から受けていた手当は、全て書物に換えて持ち帰ったといえます。帰朝後献上された漢籍は、儒教という中国学の全分野、「礼・楽・射・御・書・数」にまたがっています。彼自身、百科全書的な知識をマスターし、基本となる漢籍をもたらしたということでしょう。

真備も天平勝宝の遣唐使に従って帰国しました。帰国後すぐに正六位下に叙せられ、大学寮の助(次官)や東宮学士に任じられました。特に東宮学士になって孝謙天皇の教育に関わり、正二位・右大臣にまで上り詰めました。

留学僧たち

8～9世紀までの僧侶は、基本的に官吏の側面を持っていました。出家、得度には国家の厳しいチェックがありましたが、一旦認められれば税の免除があり、その行政能力や修行の程度に応じて、役職や位階が与えられました。僧侶の出身母体は、中下級官人、中小氏族、渡来系氏族が多かったようです。留学僧は、帰国して自分の履歴に花を添えようと考えていました。

長期留学僧の中で、大きな足跡を残した道昭・道慈・玄昉・円仁といった人々は、皆このタイプです。道昭は、河内を本拠とした渡来人。第2次の使節(653)で入唐し、当時インドから帰って活躍していた玄奘三蔵に師事し、多量の経典を持ち帰りました。

道慈は、法隆寺近傍の中小豪族の額田部氏の出身。大宝の遣唐使(702)で渡唐し、16年にわたる留学を終え、養老の遣唐使(717)で帰国。その見識は広く、奈良時代に護国経典として尊重された「金光明最勝王経」は、中国訳されたばかりの段階で、彼がいち早く持ち帰ったといわれます。日本の仏教界の刷新にも貢献しました。

玄昉は、道慈と同じく、下級官人を多くだした阿刀氏の出身。仲麻呂や真備と共に養老の遣唐使で渡唐、玄宗皇帝の愛顧を受けました。帰国に際して5046巻もの経典をもたらし、後の写経事業に貢献しました。帰国直後に一躍にして僧正に任ぜられました。聖武天皇の国分寺建立構想は、玄昉の着想と言われます。

円仁もまた、下野国の豪族出身です。最澄について天台宗を学びました。承和の遣唐使(838)で入唐。10年にわたる在唐の後帰国、最澄や空海が持ち帰らなかった経典を集め、日本密教の発展に貢献しました。その紀行文「入唐求法巡礼行記」は、日唐交流史として、また唐の歴史を知る上でも高く評価されています。

■注

- 1) 灌頂(かんじょう): 頭頂に水を灌いで諸仏や曼荼羅と縁を結び、正しくは種々の戒律や資格を授けて正統な継承者とするための儀式のこと。
- 2) 同じ遣唐使で渡海: 延暦二十二年(803)に出発したが、悪天候で一旦渡海を断念、翌年に再出発した。